

長期連載論文

第1回

# 文明の輪廻転生

—アトランティス異聞—

会長 渡辺豊和

## 第一章 アトランティス

スを求めて

### 縄文夢通信網の発見

発見などというものはひょんなことがきっかけになるものらしい。縄文夢通信網の発見もまさにそんなことであった。はっきりした日付けは忘れてしまったが多分七十年代の最後の年か八十年代のはじめの頃のことだった。七十年代一杯、その期間の大半が三十代だった兄も私も日本の古代遺跡をよく見て廻っていた。といっても私は奈良盆地の中心地に居を構えていたから会社勤めの兄が出張か休みを利用して東京から私の家にやってきて奈良盆地中に散在する古代遺跡をめぐる程度に止ってたわけではないことに過ぎない。奈良盆地の至る所に巨大古墳があるが丁度兄と飛鳥を巡った後耳成山が見える所まで来た時である。相当遠望だったため私にはそれが巨大古墳に見えた。あそこまで行こうといったら兄はあれは耳成山ではないのか、お前は近くに住んでいてわからないのかと苦笑するのであった。この瞬間に私は縄文夢通信網発見のきっかけを掴んでいたことになる。耳成山は巨大古墳、人工造山ではないのか。しかも前方後円墳などよりも遙か古い時代、エジプトのピラミッドのように作られたのではないか。このヒラメキである。もしあの時兄に笑われなかったら縄文夢通信網を発見することもなかったであろうし、その後始まったアトランティス探しも、いわんや本書で触れている地球医療のことなどに思い至るはずもなか

つたに違いない。耳成山、香久山、畝傍山は飛鳥のすぐ北にあり大和三山といわれ三つとも高さ三十から五十メートル程の丘でありこれの山頂を結ぶ三角形が正確な二等辺三角形であり更に香久山と耳成山を底辺とするこの二等辺三角形の畝傍山からの二等分線で成り立つ直角三角形の三辺が五対十二対十三 ( $5^2 + 12^2 = 13^2$ ) とい

う古代メソポタミアでは聖なる三角形と呼ばれたものであったことがわかり、しかもこの二等分線は三輪山山頂の南にわざわざ作られたとしか思えない張り出し台地の中心を通り夏至の日の出の方向を正確に示しているのであった。ちなみに古代エジプトでは三対四対五 ( $3^2 + 4^2 = 5^2$ ) の直角三角形を「聖三角形」とし尊重した。ピラミッド建造にもこの原理は当然使用されたのはいうまでもない。このことは国土地理院の五万分の

一と二万五千分の一の地図上で線を書いていてわかったことである。これ以後私は更に五万分の一の地図を八帖の部屋一杯になる位に貼り合せ近畿地方全域を対象に色々と線を引き、又は消すなどしながら大和と近江の神奈備山三輪山と三上山との幾何学的関係、その他のことなどからこの日本列島にはかつて一辺ほぼ五十キロほどの整然とした菱形スーパースーパースクが樹海を伐り開いて描かれていたことをつきとめた。間違ひなく縄文時代盛期の頃のことである。この日本列島を覆う菱形スーパースーパースクは富士山頂や伊勢の神島など古代から日本人が聖地として崇めて来た場所であった。この菱形は冬至と夏至の日没方向（夏至と冬至の日の出と正確に対になる）を指していて基点は三輪山山頂南の張り出し台地の中心である。正確には三輪山のこの張り出し台地の中心を通りこの基点から南北四八・六キロごとの緯

線が全ての基準であるがいずれにしてもこの菱形は正確に計算して描き出すことが出来る。コンピュータで計算し交点を割り出したら青森から九州までに七八ヶ所地上にある。そのうち一〇ヶ所以上踏査してみたがその全てに巨石が鎮座していた。山陰地方や四国、東北地方まで足を延ばしての結果である。巨石とスーパースーパースク、これは何に使用されたのか。結局結論として得たのはこれは遙か遠い場所のシャーマン同志が夢で通信し合うため水平の太陽光（日の出、日没の太陽光は水平である）を利用した巨大装置であると言うことであった。このことは発見後数年して中国東北地方で現在も行なわれていることを北京で直接そのシャーマンに聞いて確信した。

世界の何処にでもある縄  
文夢通信網

縄文夢通信網を発見して以来私は国内外旅行には必ず磁石を持ち歩くようにしている。交点を踏査した時に気付いたことであるがその場所から夏至、冬至の日の出・日の入りの正確な方向には必ずピラミッド状の三角山が存在するのである。勿論五万分の一の地図で同時に確かめて来たのは言うまでもない。北京で中国東北地方（旧満州）の若いシャーマンから縄文夢通信と全く同じ方式の夢通信が現在でも行なわれ自分もその一人だと聞いた時にこれは全世界に張り巡らされているのかもしれないと感じた。八五年頃のことだったと思う。友人とタイの北部の旧都チェンマイに旅行した時も磁石は肌身を離さず持ち歩いていた。

チェンマイの郊外のある山頂の聖地には今、中国南部から移住して来た山岳民族が居住し阿片を吸わせたりする店などが並んでいる。

この山頂から四方を眺めているとピラミッド型の三角山が四つほど見えている。早速磁石を取り出して計ってみると正確にこの地方の冬至・夏至の日の出、日の入りの方向に一つずつ四つの三角山が位置していることがわかった。勿論私は磁石と緯度三〇分ごとの冬至・夏至日没方向の表を持ち歩いている。これさえあれば夢通信網のあるなしがわかることを国内旅行で充分確かめていたのである。インド旅行中には丁度中部にあるジャイナ教の最大聖地が夢通信網の交点であることを探り得た。この時はジャイナ教の聖地に向いていることは知っていたがバスの車窓から眺める風景、特に折り重って立ち表われる山容に魔の山とも呼んだらいい異様な雰囲気を感じた。これも国内の交点近傍の山容

が示す異様さに似ている。但し遙かにこちらの方が魔界を思わせる。しかしそれは私だけに感じられることらしく国内でもこのインドの場合でも同行者には何の変哲もない風景らしい。ではどんな魔界なのか。山腹に巨石が突き立っている。山頂がリング(男根)さながらに垂直にそそり立っているのであるがそれもよく見なければ気付かないことが多い。処が私にはそれが巨塔に見えたり石柱の森に見えたりする。そうすると魔界が眼の前に突如立ち表われたと感じるのである。スペインのバルセロナ郊外に象や虎などの動物の形をした奇岩が森をなすモンセラと呼ぶ山があり、ここはこの地方では遙か古代から聖地として崇められ山腹の断崖にへばりついて建っている(と言っても相当巨大な会堂である)教会には西洋世界でも珍しいと言われる黒マリア(即ち聖母マリアでないキリスト教以前の神)像がある。この山は現代で

も世界各地から秘教の信者が参集し年に数回、決まった日に必ず山が光を発するとのことである。私もこの山には三度か四度訪ねたがあいにくその決まった日ではなかったので山が光るのは見ていないが黒マリアは拝んだ。異様な神像ではある。私がインドのジャイナ教聖地近くの山に感じたのはモンセラと同じ異様さであった。但し実際にはモンセラとは違い奇岩が森をなしているわけではない。私にはそう見えるのである。ともあれ他のインド地方・インドネシア・更には中南米のインデオの遺跡周辺地形にも必ずこの魔界が立ち表われた。磁石で確かめると縄文夢通信がそこに存在したことがわかるのであった。

## 縄文夢通信網は世界を覆っていた

古代メキシコのユカタン半島に一六世紀中葉近くまで高度な文明を維持していたマヤにはエジプト最古のピラミッド、サッカーラの階段ピラミッドに実によく似た形のピラミッドが至る所に建てられている。神殿群の中心に階段ピラミッドが据られているのもサッカーラと全く同じである。但し高さや規模はマヤはサッカーラに比べて随分小さい。せいぜい高くても半分位である。又建造年代もサッカーラはBC三〇〇〇年近いのにマヤはAD八〇〇年を遡ることはなさそうである。従って三八〇〇年近くの時代差がある。しかしメキシコを旅しているとメキシコシテイ近郊の有名なティオティワカンの台形角錐ピラミッドも含めエジ

プトを旅行している気分になるほどピラミッドが多いし建築風景がよく似ている。何時の時代かにエジプト人がメキシコにやって来て建築を教えたのではないかと思いたくなる。ユカタン半島のピラミッドは四面のうち一つは夏至の日没方向、その裏面は冬至の日の出方向を向いている。アメリカの超古代史家デニケンが現在の宇宙船を操縦する姿そっくりの浮き彫りが王の墓の石棺のふたにほどこざれていたから宇宙人の基地ではないかと騒ぎ立てたパレンケのピラミッドもそうなのである。パレンケは周囲を山に囲まれた盆地でピラミッドの頂上からは鬱蒼と茂った熱帯雨林のジャングル越しに四周の山々が見える。磁石で計ってみるとやはりピラミッドの面が向いている夏至の日没、冬至の日の出の方向に正確に丸い山がある。三角山ではないが縄文夢通信網の交点の巨石に当るのがピラミッドでありそこから放射する冬至線、

夏至線上に乗る三角山に相当するのが二つの丸い山と言うことになる。日本においては冬至の日没方向が重要なのは神社がその方向に一直線に一〇以上も並んでいる琵琶湖東岸の例を見るまでもなく巨石もその方向に一直線になっている例はいくらでもあることからわかる。しかしマヤは夏至の日没が重要らしい。チチェンイツアーの春分と秋分の日没一時間前に影が蛇体になる仕掛になっているにもかかわらずそのピラミッドや天文観測装置（と言ってもそのまま建築）も夏至の日没方向が重要であったことを示している。日本は夏至の頃は梅雨で太陽の顔を拝むことが難しいから冬至が重視されたとに違いない。マヤの場合は冬至の頃が乾期で熱暑のため日没を希求するからなのかもしれない。マヤや古代インカ文明の遺跡を巡っていて縄文夢通信網の重要装置、巨石や巨大石造物と冬至線、夏至線上の三角山の存在はほとんど

例外なく見ることが出来た。中近東のイランやトルコでも同様であった。特にトルコは日本の東北地方の緯度にあたり又山々の美しい国である。世界最古の都市チャタルフユック遺跡があつたりシュリーマンの発掘で有名になったトロイの遺跡もある。それから謎の民族ヒッタイトの帝国もこの国にあつた。これ等の豊富な遺跡も例外なく夢通信網の存在を示した。こうなつて来ると縄文夢通信網は全世界を覆つていたのではないかとでも思いたくなる。そこでコンピュータで世界全ての交点を算出してみて驚いた。エジプトのギザのピラミッドは縄文夢通信の重要な装置であることがわかつて来たからである。詳細は第六章に譲る。いずれにしても全世界を縄文夢通信網に限なく覆つていたことがわかりその交点の配石遺跡は単なる太陽信仰の神殿でもなければ夢通信装置でもないということによりやく気付くこととなつた。中国の

風水術の龍脈・龍穴が中国医学の経絡とつばに相当すると言われているが医学に比べて風水術は粗雑な気がしていたから、この全世界を覆う縄文夢通信こそ経絡であり巨石や巨大石建造物がつばに違いないと確信した。

## 大和三輪山とエジプトのギザ

大和三山、畝傍、耳成、香久が人工造山、ピラミッドでないかと最初に書いたのは『大和に眠る太陽の都』（学芸出版一九八三年）であるがこの本が『サンデー毎日』の記者の眼に止り当時物議をかもし出した連続特集『日本にピラミッドがあつた』に引っぱりだされ

ることになった。八四年だったか八五年だったかはもう忘れてしまったがほぼ半年はつき合ひ、特に最初の三ヶ月は忙しかつた。大和三山ピラミッド説も三度に亘つて紹介されたと記憶している。あの時には多くのピラミッド説が飛び出したがそれから一五年近く経つ九八年現在になつていまだにその説を言い続けているのは私だけとなつてしまつた。私の縄文夢通信装置としてのピラミッド、巨石、洞窟の三点セット説が最も穩当だつたからではないか。しかも私の「ピラミッド」は自然の山を整形したものであり積み上げたものではないから比較的無理が少なかつたのであろう。この整形山の典型例はトルコ東部に厳然とあつたがそのことを知つたのは八九年であり実際に行って見たのは九六年の六月である。ネムルート山と言ひ標高二〇〇〇メートルを越す高山の山頂を整然とした円錐ピラミッド形に岩を削りとつてゐる。勿論

神殿も付随して建られている。これに比べたら大和三山の整形など子供の遊びに過ぎない。人類は信じられないことをやつて来たものである。このネムルート山頂に参詣した時につくづくそう思つた。ギザの三大ピラミッド建造にも匹敵する壮挙に違ひない。『大和に眠る太陽の都』では地上から三〇〇メートルの高さの三輪山も北側斜面は整形され、更に山頂南下の張り出し台地を作つたと書いたがこれもネムルートの労苦に比べたらもののかずではない。いずれにしても三輪山と大和三山は人工造山であつてエジプトのギザの三大ピラミッドに匹敵し両方ともに同じ原理で作られたに違ひないと推理しそれをピラミッド原理と呼ぶべきであると言つた。一五年以上前のこの直観は今にして思えば正しかつた。しかもギザの第一ピラミッドと三輪山は緊密な関係があり一方が崩壊したら必ず他の一方も崩壊するであらうと

確信出来るのである。幸いなことに二つとも崩壊には至つていない。もしこの双方が崩壊する時が来たらそれこそ人類滅亡の時であるまいか。三輪山と大和三山の整形とギザの三大ピラミッドの建造を比べたら明かにピラミッドの建造の方が困難であらう。又こちらの方が極限の人知を必要としたことは現代技術をしてても特に第一ピラミッドと同じものを作ることが出来ないことからわかる。こうまでして何故エジプトの人々はピラミッドを建造したのか。ファラオの権力の誇示のために作つたとギリシアの歴史家ヘロドトスは言うがそんな皮相なことのために作られたはずはない。又三輪山と大和三山の整形は最大限引き下げてみてギザのピラミッドと同時代だつたとしてもBC三〇〇〇年頃のことである。その頃にこの日本にファラオに匹敵する巨大権力があつたとは思えないから「日本のピラミッド」造りは当時の人々の全員の

総意を結集して行われたであらう。ギザの三大ピラミッドの建造も日本の山の整形も遂行されるべきのつべきならぬ理由があつたに違ひない。当然それは地球規模の理由であり急激な気候変化に対処する行為だつたのではないかとまず考えられる。とりあえず考えられるのはBC四〇〇〇年頃の極端な地球温暖化である。ギザの三大ピラミッドはそれより一〇〇〇年遅れるがこれはその前に建造されていた人工造山か神殿を壊してより完全なものとして新築されたのかもしれない。それとも現代の大気汚染に似た人為的原因があつたのだろうか。

## アトランティスを求めて

アトランティス島は今から二五〇〇年前のギリシアの哲学者プラトンが生きた時代よりも更に九〇〇〇年前に大海に没してしまっただから現代からは一万一五〇〇年前のことである。アトランティス大陸とよく言われるがプラトンの著書には島とはあっても大陸とは何処を探しても書いていない。プラトンの記述を正確に読めば沈んだのは福島県位の広さであって、もしこの位の島が一夜にして沈む火山爆発があったとしたら一〇〇年は火山灰が地球全体を覆い昼も暗い暗黒世界となり地球は寒冷化し死滅する生物種も多かったに違いない。それだから九〇〇〇年間もその記憶が語り継がれたのである。世界を限なく覆った縄文夢通信網はアトランティス文明の遺存物でないのかと考えるようになる。

如何に三内丸山が予想を遙かに越えた高度文化の花を咲かせていたとしても縄文夢通信網を列島全体に張り巡らせるエネルギーが当時の人々にあったとは思えない。

ホモサピエンスが地球上に立ち表われて一〇万年と言う。ここ一〇万年人類の脳に何の変化もなく一〇万年前の人々も現代の私達と同レベルの知性を持っていた可能性も全くないわけではないらしい。

地球の地軸が一回転する才差運動の周期は二万五七七六年でありひよっとするとその半期一万三〇〇〇年で一大文明が興廃するのならばアトランティス海没後一万一五〇〇年であり残りは一五〇〇年しかないと言うことか。但し現代は八回目の文明である。一つ一つの文明は全く違った様相をもつ

ていて地軸がある点から最も遠い所に移動するのが一万三〇〇〇年であるからこの間に一つの文明が興廃しこれから一万三〇〇〇年かけて前文明とは最も遠い性質の文明が起きて又滅びる。丁度才差運動一周期で人類は0点から0点に二度戻ることになる。考古学的には旧石器時代から新石器時代への境界線が0点である。となれば旧石器文化はどの文明でも0時代の

進化・進展して様相の異なる個別の文明が出来上がって来ることになる。いずれにしてもアトランティス文明は現在の機械文明とは異質の様相を呈していたであろう。それではどんな様相の文明であったのか。これを知るにはまず謎とされる場所を探り出さなければならぬ。こうして私のアトランティス探しが始まったのだが八七年か八年頃のことである。



文化であり共通しこれから様々に

紆余曲折の結果アトランティス

図 1-1 二万年以前の太平洋沿岸

は太平洋上の島・インドネシアのスラウエシ島であり、この島の北端の福島県位の広さが海没したことがわかった。探し出した理由は至って単純明快である(図1-1)。アトランティスに関する原著述である。プラトンの『クリティアス』を何の余見も持たずに読み解いて行ったらそうなたに過ぎない。あの本で重要なのはエジプトであり古代エジプトが楽園としたポイントこそアトランティスであり何んとポイントを描いた浮彫がルクソールの死の谷のハトシェプスト女王葬祭殿にあるではないか(図1-2)。エジプトからここに至る海路に出現する魚、ポイントまでの海路で立ち寄る港の風景、ポイントの人々の家などが克明に描かれていた。特に注目すべきは人々の家である。高床式で家屋は卵を半分に分けて立ち上げたに似た独特のものであり、これは近年までインドネシア・ジャワ島南の近海の小島にありジャカルタの国立博

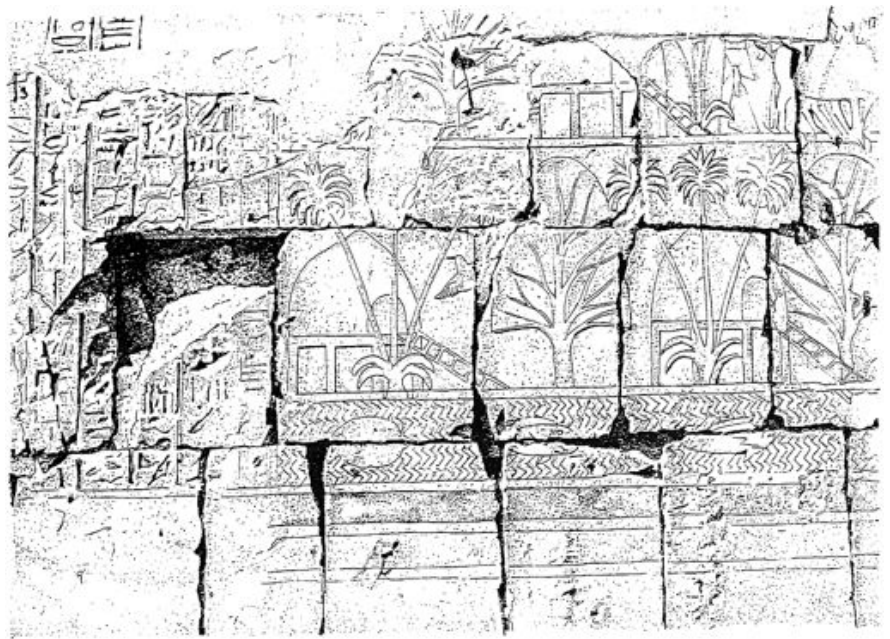


図1-2 ハトシェプスト女王葬祭殿浮彫

物館には写真まであった。ハトシエプスト女王葬祭殿に描かれたポイントの人々の家は余りに独特な形の高床住居だったからこんなものは何処にあるのか皆目見当もつかなかったが目的のスラウエシ島に

渡る直前に何気なくたまたま立ち寄ったジャカルタ国立博物館にそれと寸分変わらない家屋の写真を目のあたりにするとは想像も出来なかった(図1-3)。

この博物館は巨大で展示物の量も膨大でよくも都合よく見つかつたものだと後になって不思議であった。

それでは何故古代エジプト人にとっての理想の地ポイントがアトランティスなのか。答は至って簡単である。プラトンによればアトランティスのことをエジプトに行つて

神官から聞いたのは彼の祖父クリティアスの幼少の頃の政治家ソロンでありそのソロンが未だ幼かつたクリティアスに語つて聞かせたのだと言う。しかしプラトンが『クリティアス』を書く際にエジプトの神官が語つた地名や人名を全てギリシア地名、ギリシア人名に変えてしまったと自ら記している。

紅海が地中海に、紅海からインド洋に出るバブ・エルマンデル海峡が地中海から大西洋に出るジブラルタル海峡(ヘラクレスの柱)に変えられた可能性が極めて高い。

アトランティス島はヘラクレスの柱の向こうにあるとプラトンは書いているがギリシア人である彼からすればそれは大西洋と言うことになるがエジプト文明にとって地中海は死の海であり彼等にとつては紅海こそ重要な海であった。紅海の向うはインド洋、太平洋である。エジプトの神官はアトランティスとは言わずポイントと言つた可能性が高い。実際スラウエシ島の



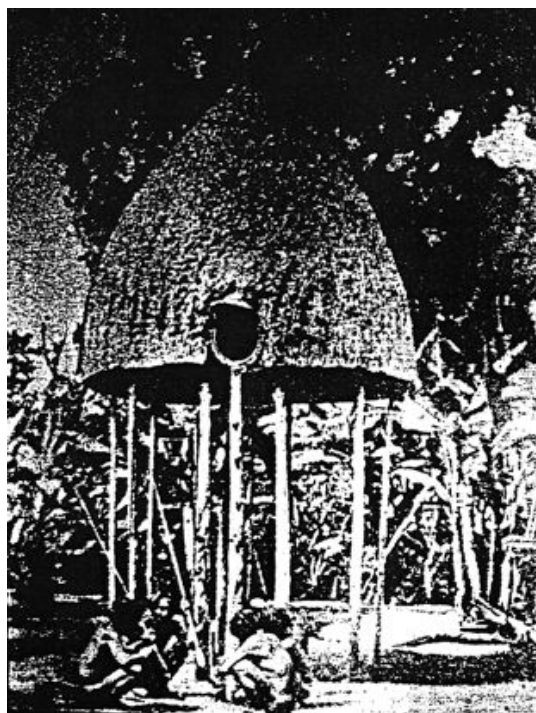


図 1-3 ジャワ南近海小島の民家

先住民トラジャ族の住む高地にブ

ントという名の村落が現在でもあ

る。残念ながらスラウエシ島には

ハトシエプスト女王葬祭殿に描か

れていた高床家屋に近いものは見

当らなかったがジャワ島の南近海

の小島にまったく瓜二つの特異高

床家屋が今世紀のはじめ頃まで使

われていたことがはっきりしたか

ら私のアトランティス即ちスラウ

エシ説は相当の確度を増したと言

えそうである。『発光するアトラン

ティス』(人文書院)刊行後二年の

ことであつた。

### エデンの園と蛇

アトランティスが南太平洋上即

ち南洋のスラウエシであつたのな

らアトランティス文明は南洋的特

徴を大きく示していたはずである。

南洋的特徴で最も目立つのはジャ  
ングルの中の生活であろう。

プラトンの『クリティアス』に  
もアトランティスが南洋を思わせ  
る果実のことがあり特に「軟膏を  
もたらす木」がバナナならプラト  
ンの時代にはインドネシア一帯に  
しか生育していなかったから私の  
仮説の信憑性はさらにますことに  
なる。アトランティスが南洋のス  
ラウエシであつたとしたらたとえ  
その文明がプラトンが描く高度な  
土木、金属加工の技術が発達して  
いたとしても南洋的特徴は備えて  
いたであろう。それを復元してみ  
るのもそれほど難しくはない。現  
代のインドネシア諸島の中で特に  
目立った文化の花を咲かせている  
のはバリ島である。バリ島は芸術  
の島であり舞踏は素晴らしい。踊り  
子の着る衣装も絢爛豪華であるが  
南洋の衣服をそれ程必要としない  
はずの生活からよくもあれ程のも  
のが作り出されたと感嘆する。南  
洋の高温多湿は早朝四時から六時

頃までの農作業で充分過ぎるほど  
の作物の収穫を保障するから日中  
は休み夕方から踊りや音楽を楽し  
みはじめ八時頃に終る日常を人々  
に営ませる。こんな極楽浄土の中  
の生活に似た生活環境をアトラン  
ティス島民も享受していたであろ  
う。楽園での生活で最も恐れられ  
たのは病氣と死であつたに違いな  
い。極寒の地や砂漠などの乾燥地  
では生活は過酷で死は休息にもな  
り必ずしも恐れられることではな  
いであろうが楽園の生活は永久に  
生き続けたいと人々に思わせるで  
あろうから彼等には死は休息では  
なく終焉であつたはずであり病氣  
を極端に恐れた。南洋は高温多湿  
で病原菌も多く病氣を克服する医  
術が発達したのであろう。アトラン  
ティスでも当然医術は発達したで  
あろう。プラトンが描くような高  
度文明の花を咲かせていたのなら  
ば医学、医術も極めて高度なはず  
であつた。現在でもスラウエシ島  
のママサ族のなかに死者を一時蘇



生ずる術を駆使用するシャーマンがいるし、バリ島の医師も骨折や捻挫を一瞬にして完治させてしまう。これらのことはアトランティス医術の残存形ではあるまいか。アトランティスは全世界を統括した文明であつたし、この島が一夜にして海没するまでは一つの例外を除いて全世界は平和裡にあつたとプラトンは書いてある。となればアトランティス文明の一大特徴として医学、医術があり更にそれが地球医療にも及んでいた可能性が高いのではないか。

さてエデンの園である。生まれたまの姿で暮っていたアダムとイヴは蛇に騙されて禁断の木の実を食べ神の怒りをかい楽園を追放されてしまう。この場合の楽園、エデンはアトランティスではあるまいか。それでは純真無垢の二人を騙ました蛇とは何か。アトランティス島民も最後は巨大な黄金の神像を作つたため神の怒りを引き出し海没の憂き目にあつてしまう。

過剰な物質的欲望を充すために手にした高度技術がアトランティス島民自身の首を締めたのである。アダムとイヴを楽園の生活を享受していた頃のアトランティス島民とすればそれに要らざる知慧を吹き込んだ蛇はアトランティスの悪魔と言うことになる。

## プラトンの遺言『テイマイオス』

人類にとって七回目か八回目の文明である現代文明は明かに大陸中心の温帯に發生展開したが先文明の中心地アトランティスがインドネシアのスラウェシであつたのなら熱帯性海洋文明であつたはずである。先文明を、直接引き継い

だと思われる古代エジプト文明も熱帯海洋性を濃厚に示していることからしてもまずアトランティス文明の特徴は推量出来る。全世界を覆う縄文夢通信網はBC四〇〇〇年以前に完成していたのは確実であるがこれもアトランティス文明の遺存システムであつた可能性が極めて高い。何故か。縄文夢通信網は菱形の網でありこれを東西に二分するとほぼ正三角形となり地球を覆う球面三角形となる。地球表面を整然とした幾何学形に細分割しているのが縄文夢通信網と言うことである。更に言うなら縄文夢通信網を支えているモチーフは「幾何学」なのである。このような地球を覆う幾何学形態やたとえばエジプトのピラミッドと日本の三輪山、大和三山との地理的幾何学関係を私は「地球幾何学」と呼んだ(『発光するアトランティス』)。プラトンは五つの正多面体を非常に重視したから正多面体はプラトン立体とも呼ばれる。又プ

ラトンは幾何学と同様比例数も同じ、宇宙自然の無限調和は幾何学と比例数をもたらすと信じていた。最晩年になってわざわざアトランティスのことを書いたのもこの文明が幾何学と比例数を最重視して無限調和を実現していたからである。音楽も比例数の組合せの一大表現であるとプラトンは力説するが彼にはアトランティス文明時代の地球は名音楽の旋律に似て妙なる音を発する世界としてイメージされていたのであろう。縄文夢通信網もまさに地球を美しく細分割する幾何学紋様であつた。プラトンがこの地球を無限分割するが如き縄文夢通信網のことを知っていたかどうかはわからない。彼のアトランティス記述には直接触れられていない。しかし『クリティアス』と共にアトランティスを紹介している『テイマイオス』には宇宙、自然の調和は幾何学と比例数の組合せに依存すると繰り返し強調しているし、彼は地球は球体で

自転していることも知っていた。一人一人の人間の魂が天球の星々の一つ一つと結びつきそれがネットワークをなしているとも言う。天も球をなすことは自明のこととして彼は語っているから天球を極小にした地球にも天球の星々同様無数の点が整然と列をなしているとみなしていたとしても少しも不思議ではない。その無数の点こそ縄文夢通信の交点であった。プラトンの思考法からすれば縄文夢通信網の交点は地球の内部に宿る魂が外部に発露して来る出口でもあると言っているのではないか。ここから発露して来る地球の魂と人間一人一人の魂が結合して宇宙・人間・地球が三位一体となる。こんなイメージを描くのが『ティマイオス』でありプラトン神秘主義の原典と言われるのももつともである。アトランティスは理想の文明であったとプラトンは言うがその理想郷は南洋に発生したから実現出来たに違いない。果実など

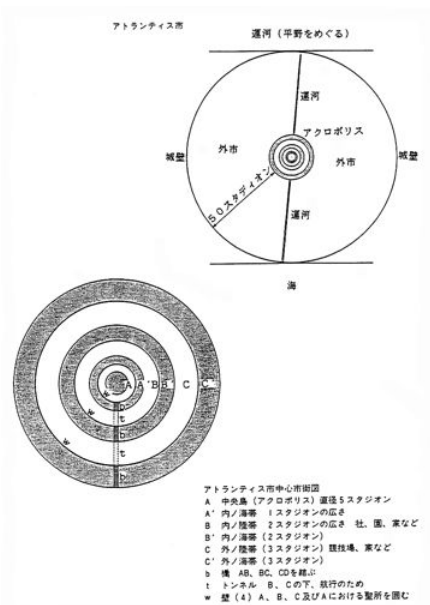


図1-4 アトランティス市

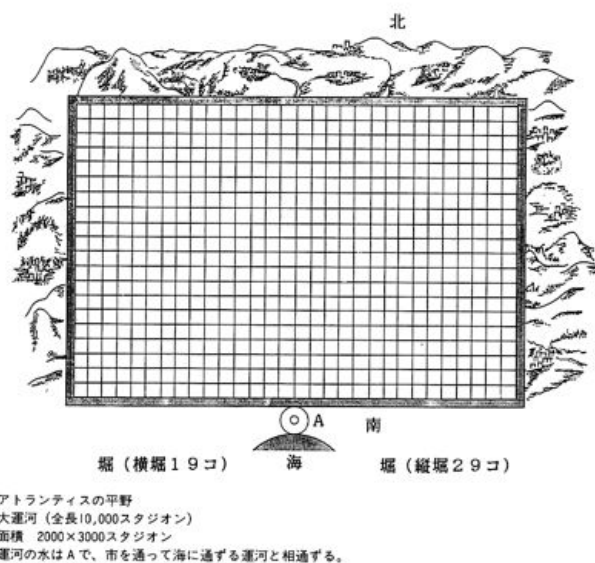


図1-5 アトランティス三図形

の豊富な食料に支えられた平和な生活、陽光に輝く海がもたらした無限調和の文明。これがプラトンが『ティマイオス』で後世の人々に遺した先文明の消息であった(図114・115)。

プラトンは病気は魂が調和を欠いて起ると『ティマイオス』で言っているが世界の乱れも宇宙(や地球)の魂の不調和によると明言している。アトランティスの平和

は当然宇宙(や地球)の魂の完全調和に由来していたことを暗に示している。又人間は球が基本で前後左右への運動のため手足がついたと説明しもとは宇宙(や地球)に似せて作られているとも言

十二号につづく